

二〇一八年八月一七日

牛乳ののどごし涼し高牧場
雷鳴の近づくほどに身の縮む
風孕みては窓を打つ秋簾
夕端 居枯 山水に時忘れ
照り返す地に影落とす黒揚羽

そうけい

あさこ

せいじ

ぼんこ

三 刀

二〇一八年八月一六日

孟蘭盆会よちよち歩きできし子も
語り部の言霊重き終戦日
万灯回閣に五重の塔浮かぶ
帰省子の話尽きざる夕餉かな
帰省して足湯に疲れ癒しけり

なつき

智恵子

ぼんこ

満 天

せいじ

二〇一八年八月一四日

次の代の夫婦に任せ盆用意
阿波踊り地を這ふやうに進みけり
園児らも手足巧みに阿波踊
盆僧の横に鎮座す幼かな

あさこ

たか子

治 男

なつき

二〇一八年八月一三日

パノラマの水平線に雲の峰
蚊柱を走り抜けたる鎮守杜
鏡なす川面を進むうろこ雲
二〇一八年八月一二日
供花手向け碑に額づけば秋茜

ぼんこ

愛 正

明日香

智恵子

二〇一八年八月一日

帰省の子直ぐに戻りぬ大阪弁
奥琵琶の嶺々滴りて湖碧し

たか子

せいじ

毎日句会みのる選・二〇一八年八月一九日